

法鏡 2

1ー欲や怒り嫉み妬みなどたちの悪い本性

それらを止めようと因果の道理にしたがってやめようともがいている。

それが大変醜いものと認識出来るのに次々と沸いてくる。

たとえ

学生の時親友だった友達から結婚したとはがきが届いた。

心から喜ぶはずが相手の奥さんがあまりにもベッピンさんで何だかうまくあいつ若い子をだまくりしてくだいたんだー。

となんとなく面白くない自分。それがそれほど美しい人でないとほのぼのと笑顔で歓迎出来てしまう。

2ー親鸞は法鏡に近づく と見える事

修繕も雑毒なる（見返りを求める心）

たとえ

お金を借りた方はすぐに忘れてしまう。指摘され暫く考えてやっときずく。

お金を貸した方は場所や時間などもはっきり覚えていていったい何時返してくれるのだろうと思っている。

よかれとおもい老人に電車で席を譲ったが有難うの言葉がなかった場合ものすごく腹が立つ。

交差点でここでゆずれば少しでも流れが良くなると善意の思いで車の行く道を譲ったがハザードのお礼もなく何だか腹がたった。

法鏡に近づくとはどういうことなのか？

100円を知人に謙譲したが音沙汰がない。有難うの一言もないのかとふと思う。しかし上記であるような腹が立つ事はあまりない。

1万円だったらどうか？10万だったらどうか？1000万だったらどうか？

額が大きくなるほど心は見返りの心がある事にきずくことになる。

善行を努めその行為が大きいほど雑毒が強まり小さい施しで気にならない事がかえって苦しみにあい見返りの心がある事にはっきり出会ってしまう。

ここで経はいつている。

善行を強めなさいと。もしそこで何か向上し気持ちが良くなっていたとしたらそれは信仰ではない。

善行を無償に本気で行う人は法鏡にちかづく。

みずからその真理に程遠く偽りの心がある事に身が焼けるはずなのだ。しかしそれが法鏡に身を灯した証なのだ。